

令和六年の幕開けは、能登半島の大地震に始まりました。

妻と三人の子どもさんを、この地震で一度に亡くした三十代の男性が、四ツ並んだ遺骨を前にして、涙をぬぐいながら、その思いのたけを語る様子をテレビで見ました。

お釈迦さまの教えの中に、人が生きる上での苦悩の原因として、所謂「四苦八苦」を示しておられますが、その中の一つに、「愛別離苦」があります。愛しい人とも、必ず別れの時が来るということですが、言葉では理解できても、我が身にその日が訪れた時に初めて知る、深い悲しみなのでしよう。

それは周囲の人からの労りは、充分にありがたいと思いながらも、沸き起こる私の悲しみの深さは到底、理解してもらえないと感じることでもあると思います。

大切な人を亡くされて続く、これからの

去にもどることはできません。

新型コロナウイルスにより約三年間不自由な生活が続きましたが、私達はこの間、何を思ったでしょうか。

コロナ前の何気ない生活の有り難さをつくづく感じたことではないでしょうか。

人は窮地に追い込まれて、初めて「あの時は良かったな」と気づくのです。しかしその時は遠くばかり追い求め、近くの大切なものを見失っているのです。

お彼岸は、ご先祖さまから引き継がれた今ある命に感謝すると共に、より良く生きるために、今の自分を省みる時期でもあります。今という時は、二度と戻ってきません。何気ない生活に感謝し、心静かにご先祖さまに手を合わせ、自らを振り返り、足



元の大切なものを見失わないように、より良き人生への第一歩を踏み出して下さい。

日々を一日も早く癒されて、笑顔を取り戻せる日が来られんことを念じた時間でした。

彼岸

先日、部屋を整理していましたが、昔のアルバムが目にとまり、開いてみました。

写真の中にはモノクロの物もあり、又保存状態が悪いせいか、色あせた物も沢山あります。そこに写る人の大かたが、もう鬼籍に入った人が多いものの、両親、義父母、友人・・写真に写るその姿は、笑顔で一杯です。

「ああ、あの頃は皆、元気だったナア」とか「そうだ、そうだ。こんなことがあつたっけ」とか、暫く、その頃を思い出しながら写真を眺めていました。すると懐しさと共に寂しさが込み上げてきました。

良いことも悪いことも含めて、私達は過



一口伝導板

○今日一日のうちに

ただ一度でよい

自分でニツコリ笑って

喜べるようなことをしよう

○人の世は 山坂多い 旅の道

○人間は

自分に都合のいい人を

良い人だとい

自分に都合の悪い人を

悪い人だと言う

こんなことがありました

私には、乗り物酔いをする、六歳になる孫娘がいるのですが、先日電車の中で、吐いてしまったそうなのです。「イヤだわ」という顔をして、近くにいた



中年の女性は席を立つていったそうです。すると若い男性が、床にかがみ込み、素手で吐瀉物を集め始めたのだそうです。すると近くにいた男性も、ハンカチを取り出して、集めていた吐瀉物を包み込んでくれたそうです。そして、自分のことでもないのに「すいません。すいません」とあやまりも言ってくれていたそうです。

娘も孫も呆然としている中の出来事で、ハツと気づいた娘が「申し訳ありません」とあやまると、「いいんです。これから僕は、工事現場に行くので、そこに行けば水もありますから、手は洗えます。心配しないで下さい」と言つて、汚物をもつて、電車を降りていったそうです。

闇バイトで詐欺をしたり、強盗に入つて人を傷つけたりする事件が多発しています。パワハラ、セクハラ・・と優しさとは、ほど遠い事件が次々に起こっています。

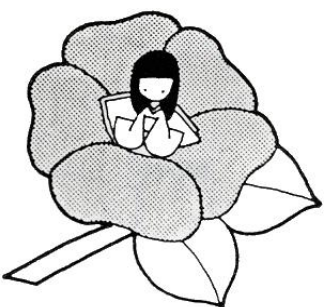
描いてみないか？」と住職に言われたのがちょうど一年前のことでした。

この涅槃図を、よくご覧になるとわかりますが、絵画の中央に大きな台があり、その上に、お釈迦さまがお顔を前方に向けて横たわつておられます。

その周りには、お弟子達をはじめ仏教守護の神々や鳥獣に至る五十二種類が集まつて悲しんでおります。但し猫はネズミを取つて殺生ばかりしているの、除かれ、ツバメはおめかししていて遅れてきたとかで描かれておりません。

沙羅の樹の緑と黄色は生と死、栄枯繁衰を表し、絵の上の方の天女は、お母さんであるマヤ夫人の姿で、樹の枝の所にある錦の赤い袋がぶら下がっているのは、お母さんの投げ与えた天の妙薬ということですが、枝にひつかかつて、お釈迦さまの所まで、届きません。

一体奥ゆかしい日本人は―？ 協調性、親切心、和睦の心に富んだ日本人の美徳は、どこへいったものやら？―と、嘆かわしい世の中になったものだと思つていた所でしたが、「いやいや、まだまだ捨てたものじゃあないヨ」と思わせる出来事でした。



涅槃会

わが国では、二月十五日をお釈迦様のご入滅の日としており、その法要を「涅槃会」といっております。

玉宝寺でも総世寺でも、「涅槃図」を二月の声をきくと、本堂に掲げます。

特に総世寺にある文化財級の涅槃図は、大きく大人の男の人三人がかりで掛けたり、はずしたりしなくてはならず、損傷するのがこわいので、その代替品となる涅槃図を

これは、お釈迦さまの死が、天上におられるお母さまのお力をおかりしてもいかんとも、手の施しようのない天命であることの意味しています。

小さな鉢をささげているのは、キノコ料理をご馳走した鍛冶屋のチユンダであり、身を投げ出して泣き悲しんでいるのは阿難尊者であります。

お釈迦さまは

「すべてのものは、移り変わるものであり会つたものは必ず別れる。」

「正しい法の中にある姿を、きちんと受けとめなさい。」

この世の姿は無常であると説かれたと伝えられています。この一枚の涅槃図の中に、いろいろな教えや萬話が×入されていることを改めて知りました。

このたび涅槃図を描く機会をいただけたことを深く感謝しています。（安藤百合子）
